

BOOK REVIEWS

Saul Bellow, More Die of Heartbreak

New York : Morrow, William & Co., Inc.,
1987, 256 p. \$17.95.

レーガン政権下のアメリカ合衆国は、保守化したとよくいわれるが、じつはそうではなく、普通のどこにでもいるアメリカ人が信じようとしている価値観が復活し、それに基づいて社会が動いている、という主旨の論議が最近されるようになってきた。たとえば上智大学の松尾式之教授は新著『アメリカの底力』(徳間書店, 1987) のなかで、レーガン大統領夫妻の相思相愛の夫婦像が、国民にあまねくアピールした事実を挙げ、アメリカ全体が Back to Basics (基本に帰れ) の潮流のなかにあるという。

1987年の夏、アメリカで、大学を卒業した25歳前後の若者数人と親しく接する機会がたまたまあった。まったくの偶然かもしれないが、彼らは10代の時に家庭の崩壊という不幸を体験し、両親はそろって離婚している。彼らは、現在それぞれ別的人生をおくっている両親たちを、それなりに評価してはいるものの、けっして両親の轍は踏みたくないという。アメリカの若者たちのなかには、男女の純愛物語、相思相愛の夫婦、暖かい炉辺での家族の集いなどに強い憧れを抱いているものがかなりいるようだ。

Back to Basics という問題に身近に触れたアメリカ滞在中、おりしもソール・ベローの最新作 *More Die of Heartbreak* を読む機会を得た。一口にいってこの作品は、80年代後半のアメリカ社会を背景にしつつ、人間のもっとも基本的かつ普遍的な問題を扱っている。語り口はいさか思弁的で無器用だが、登場人物たちの失敗や愚行を笑いながら面白く読み進むことができる。だがその笑いがじつは自分に向かっていることがわかると、笑いはにわかに消えて人間存在の悲哀が湧きあがる。そして最後は、人生の難問を前にして作者ともども頭を悩ますはめになってしまう。

この小説の中心テーマは、男と女の関係についてである。「源氏物語」から渡辺淳一の一連の恋愛小説までをみれば明らかのように、洋の東西を問わず、男女の愛は時代を超えた普遍的な小説のテーマと

いえる。男女はなぜ性慾りもなくおたがいを好きになったり、そのためになぜこれほど喜怒哀楽がたえないのか、という問題である。

ベン・クレーダーは、中西部ダスト・ボウル地帯のある大学で教える50代の著名な植物学者。南極に生息する地衣類の権威である。生来美しい女性にはめっぽう弱く、15年前に妻に死別してからというもの、常に女性問題で悩み続けてきた。エロスとタナトスとが共存しているような人物で、そのためかいつも落ちつかず、旅行をして世界中をとびまわっている。自然科学者といいながら芸術家肌のところがあり、植物学研究で発見した美の世界を自分の生活にも実現しようとしている。そしてベンが描く理想の世界は、美しい植物学の世界のように男女が愛と思いやりによって一体となり、幸福な人生をおくることなのである。

さて、そのベンは、大金持の医者の一人娘マチルダ・レイヤモンにぞっこん惚れこみ、結婚してしまう。御伽話の世界からぬけだせないロマンティストの彼は、マチルダをポーの詩「ヘレン」のヒロインにたとえて賛美する。ところが美しい女性を伴侶にして平穏な余生をおくりたいとする夢は、もろくもくずれてしまう。

一筋縄ではいかない気難しい30女のマチルダや彼女の父親からの圧力で、ベンはしだいに人生の世俗的な瑣末事に巻き込まれていくのである。あげくの果てにベンは、レイヤモン家の人々が彼の身も心も亡ぼしてしまうのではないか、という妄想に取りつかれるまでになってしまう。

物語はベンの行状を中心にして、彼を人生の師として仰ぐ甥のケネスによって語られていく。ケネスはベンと同じ大学でロシア文学を講じる30代の助教授。国籍離脱者の両親のもとで育てられ、長年パリで生活してきた。しかし両親とは逆に、アメリカの溢れんばかりの行動のエネルギーに魅せられて、中西部の叔父のもとへやってきた。

ケネスは、叔父が自分に相談もせず、しかもマチルダのような女性と結婚したことを苛立たしく思う。「生真面目な男は、美人に惚れるとすぐ結婚しようとするが、そんな結婚は九分九厘失敗に終わるものだと叔父の軽率な行動をしきりとあげつらう。

ところがそのケネスも、恋愛に関しては徹底的にナイーブで愚かだ。感情的で優柔不断なところさえある。トレッキーという女性とのあいだに娘までいるのに、結婚していない。そのうえ彼女と娘はシアトルで別居している。それにもかかわらずトレッキーの持つ可愛しさに魅せられているケネスは、自分たちの関係をポーとバージニアと

になぞらえて、理想的なカップルだと思い込んでいる。さらにケネスは、女は愛する男との子供を当然欲しがるものだ、という勝手な前提から、トレッキーが子供を生んで育てているのは彼女が自分を深く愛しているからに違いない、信じて疑わない。そう思い込んでいるケネスは執拗に結婚をせまるが、それは一方的思い込みでありトレッキーにはまったくその意志がない。

ベンとケネスという二人の男性によって展開される悲喜劇が、この小説の一番の読みどころと言えよう。頭でっかちの知識人の失敗と不幸が、読者の笑いと同情をそそる。一応の知性と社会的信用があつて人から尊敬されるはずの人物が、なぜこのような問題でつまずいて苦悩するのだろうか。愚かで滑稽きわまりない状況のように思える。しかし、作者ベローは、男女の愛というあまりにも卑近な問題をつきつけながら実はそれは人智ではとうてい解決のできない難問であることを示してくれる。どのような賢人をもってしても、男女の愛から生ずる喜怒哀楽の謎を解明することはできないし、愛の苦悩を完治する处方せんを見つけることはできないと。

「放射能汚染で死ぬ人間よりも、失恋で死ぬ人間のほうが多い」というのが主人公ベンの見解である。スリーマイル島や Chernobyl の原発事故で、反核・反原発運動が盛りあがる。だが不思議なことに、「失恋撲滅運動や失恋者救済のための街頭デモなどはまったく行われない」。ベンの言葉はたんなるジョークではない。それは主人公の真情を披瀝した警句なのだ。

ソール・ベローはこの小説で、西側世界と東側世界とがかかるる自由の問題をとりあげ、男女の愛の問題とどのようにかかわっているかを明らかにしようとした。東側社会は、個人の自由を制限することによって人間の精神を抑圧する。いっぽう西側社会とりわけアメリカでは、人々はあり余る自由を与えられて限りなく膨張する欲望の充足に苦しめられる結果、人間の精神は堕落してしまうという。

この小説に描かれるアメリカは、いわば 60~70 年代の性革命の後遺症に苦しめられる 80 年代後半の社会と国民の姿だといえよう。商品化されたセックスとその情報の氾濫、様々な新しい形の男女の結びつき、性倒錯の世界等々。ベンはこのような狂気じみた社会のなかで、心の平静を失い煩悶する。そもそもマチルダとの結婚にふみきったのも、このような苦しみから解放され、平穏無事な生活をおくることだった。ケネスについても同じである。彼の望んだものは、愛し合う夫婦と子供が家族の堅い絆で結ばれる家庭生活だった。

ベンとケネス以外の登場人物たちのなかにも、激動の60年代アメリカの傷痕を持ったものがいる。ベンのかつての女友達キャロラインはその好例であろう。彼女は60年代に天才肌の建築家バックミンスター・フラーに傾倒し、LSDを打ったこともあるラディカルな女性だった。現在は教養も富もある有能なキャリアウーマンだが離婚歴がある。ベンとの結婚を強く望んでいたことからもわかるように、社会的に大活躍をする一方、淋しい私的生活を送っており幸福な結婚生活の夢を捨てきれないでいる。

登場人物たちの親子や家族関係にも、家庭崩壊の寒々とした雰囲気が感じられる。ケネスと両親とは意見が合わず、トレッキーと母親とは険悪な仲にある。ベンの叔父ハロルドにいたっては、ベンとケネスの母親から不動産を横取りした不心得ものだが、そのハロルドも自分の息子のフィッシュルとはほとんど心の交流がない。

ベンとケネスは、平凡な幸福を求めているにもかかわらず、現代アメリカ社会はそれさえ実現できないほどに歪んでしまっている。なるほど二人は失敗をくりかえすアンチヒーローとして描かれてはいるが、基本的なものへと回帰していくとする現代アメリカの動きを、身をもって示すモデルでもある。

この小説では、芸術と社会、人文科学と科学技術という問題もサブテーマになっている。ケネスはロシア文学学者だが、その研究がアメリカ社会に実際的な貢献をしているとはとても思えない。彼自身自分がマイナーな存在であることを自嘲的なことばで認めている。人文科学、とりわけ詩、哲学、美術などは、自然科学の抬頭と発展によって、完全にステージの片隅に追いやりられてしまったのだ。科学技術万能の現代では、もはや子供のお遊び程度の意味しか持っていない。しかもケネスは、フランスを捨ててこともあろうに中西部へやってきたのである。ベンに言わせれば、中西部の人々にドーミエやゴヤの絵画など必要ない。チャールズ・アダムズの漫画が、まさに中西部の平均的な文化水準を表わしている、というのである。

一方、生粋の中西部アメリカ人のハロルドは、自分が不毛な大平原に現代アメリカ文明の象徴ともいえる近代的な超高層ビルを建設したことを誇りに思っている。彼はアメリカ合衆国のために偉業をなしとげたと自負しているのだ。ところが同じ中西部で育ったベンは、植物の形態学を専攻する科学者だ。自然学者でありながらも形態学などという地味な学問をするベンはケネスと同じようにマイナーな存在である。現代アメリカが求めているのは、「エイズの治療法を発見した

り、老人性痴呆症を治したり、臓器移植を可能にしたりする科学者」なのである。一体だれが、南極の地衣類の研究をしている学者を必要としているだろうか。

それでは「失恋で死ぬ人のほうが多い」という問題はだれが解決するのであろうか。むろん芸術家や人文科学者が解決できるわけはない。げんにベンやケネスの失敗例であきらかである。まして自然科学や社会科学で満足に解決できるわけでもあるまい。

ソール・ベローはこうした疑問を読者に投げかけつつベンやケネスを愚かな失敗者としてかなりシニカルに描いている。しかし、シニカルなのはベローに特有のポーズなのであり、ロシア文学者、植物形態学者としての登場人物たちに暖かい愛情と理解をもっていることも事実である。Back to Basics にいささか関係のある点だが、「人間とはなにか」というもっとも基本的な問題に真正面からとりくむことのできるのは、ほかならぬ人文科学であるからだ。

丹野 真（上智大学 外国語学部教授）